

今号の内容

- 市町村の歴史系資料館が生まれた背景と課題
- みどころ紹介「オクザシキ」
- トントン紙ずもう
- 高田の徳利
- 秋のイベント予定

市町村の歴史系資料館が生まれた背景と課題

市民学芸員 佐久間 茂



考古館正面(1975年・昭和50年3月頃撮影)



開館直前の難波田城資料館(2000年撮影)

難波田城資料館のような市町村による歴史系資料館の設置は、戦後復興期における地域のアイデンティティの再構築が出発点の一つだと私は考えています。

歴史系資料館のこれまでの推移を私なりに整理してみました。

1950年代以降、各地域では戦災や急激な近代化によって失われつつある歴史的資料の保存が急務となりました。この時期、1950年(昭和25年)に文化財保護法が制定されたのをきっかけとして、地域の歴史系遺産を体系的に収集・保存しようとする機運が高まり、各自治体が独自に文化財保護に取り組むようになります。

そして1970年代(昭和45年～昭和54年)以降、高度経済成長に伴う都市化の進展により、伝統的な地域社会の変容が加速していきました。これに対応するため、多くの自治体が郷土史料館や歴史民俗資料館を開設し、地域固有の文化遺産の収集・展示・研究活動を本格化させていきました。富士見市にも1973年(昭和48年)に考古館が開設されています。

1980年代(昭和55年～平成元年)になると、生涯

学習社会の実現を目指す政策的な後押しもあり、資料館は単なる保存施設から地域住民の学習拠点へと機能を広げていきます。

さらに2000年代(平成12年～平成21年)に入ると、指定管理者制度の導入や市町村合併の影響を受けて、運営体制の見直しが進みます。またIT技術の普及により、資料のデジタル化や情報発信などに積極的な施設も増えてきました。

しかし、今日これらの資料館は深刻な課題に直面しています。最も大きな問題は慢性的な予算・人員不足です。地方財政の逼迫^{ひっぱく}により運営費が削減されるのと合わせて、専門的知識を持つ学芸員等の職員の確保が困難になっています。また施設の老朽化や収蔵スペースの不足も深刻で、資料の保存環境を維持することが困難になりつつあります。

今後、市町村の歴史系資料館が地域文化の継承拠点としての役割を果たし続けるためには、持続可能な運営体制の構築に向け、住民の理解と賛意を得る努力を重ねた上での絶え間ない取り組みが必要だと考えます。

市民学芸員のページ *このページは市民学芸員が原稿を執筆、編集しました。

難波田城 ちょっと拝見 みどころ紹介

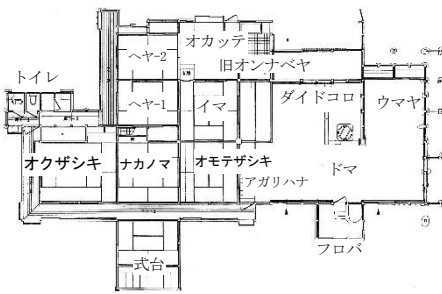
古民家シリーズ③「オクザシキ（奥座敷）」

座敷とは本来、畳が敷き詰められた部屋をいい、後に客間に限るようになりました。旧大澤家住宅の客間にはオモテ、ナカ、オクの三部屋があり、オクザシキは式台等と共に名主の役宅として機能を果たすための空間でした。

明治時代に入ってもオクザシキは大切な客に限り用いられ、それ以外のときは使われない特別な部屋でした。

オクザシキには、装飾として庭を見渡せる付書院や、違い棚、床の間などがついています。付書院は、床の間の脇に設けた板張りで縁側に張り出した棚で、前に明障子を立てたものです。これはかつて作り付けの出文机であつたといひます。違い棚とは、隣り合う棚板を段違いに取り付けたもので、床の間の脇につけられるものです。

これらの造りからなる旧大澤家のオクザシキは、室町時代以降、主に武家の住宅に行われた建築様式の一つである書院造の影響を強く受けたものと言えます。（内藤 恒義）



旧大澤家移築前間取り図
『富士見市立難波田城公園古民家復原工事報告書』より



旧大澤家住宅 オクザシキ
左奥が付書院、右奥にあるのが違い棚

おもしろ・なつかし体験〔82〕

トントン紙ずもう

このコーナーは、難波田城公園での体験学習やイベントの紹介・報告・参加者の感想などを取り上げます。

ちょこっと体験では、大相撲の本場所の千秋楽または中日に「トントン紙ずもう」を実施するのが恒例となっています。

古民家で行われることもあります。七月場所は、7月27日(日)に冷房の効いた資料館の講座室で開催されました。

参加者は受付で、白紙の「力士」の人形と、色紙に竹ひごをつけた「のぼり」を受け取り、所定の支度部屋(テーブル)に着きます。

テーブルには筆記用具とハサミが用意されていて、まず白紙の「力士」に思い思いの色付けをし、人形の形に切り、二つ折りにし完成させます。次に「のぼり」に「四股名」を書きます。参加者が作った「まわし」の色や顔つきは様々で、「ものけ山」

とか「やまかんたろう」などユニークな「四股名」の力士が登場しました。

そして最初に、練習部屋の土俵で腕ならしをして、屋根付きの本番用の土俵に上がります。

本番では軍配を持った行司役の職員が高らかに「四股名」を読み上げて、勝ち負けを裁き、星取表を作成します。

親子対決でも、男女対決でも全くハンデ無用の熱戦が続き、しまいには職員から軍配を譲り受け行司になりきる男の子も出ました。

九月場所もどんな熱戦が展開されるのか、今から楽しみです。（小山内 鏗爾）



早くも練習部屋から熱戦が展開！

人の創ったもの★人の使ったもの

たかた とくくり 高田の徳利

「高田徳利」、「通い徳利」、「貧乏徳利」と呼ばれる徳利を皆さんはご存じですか？どれも同じ徳利を指し、明治時代から昭和 20 年代頃まで使われていた徳利です。店名や地名などの文字が大きく筆書きされているのが特徴です。「子どもの頃に見たことがある」、「父親が使っていた」という人もだいぶ少なくなっただけかもしれません。今回、令和7年秋季企画展（11月15日～令和8年1月12日）のテーマの一つとした当館所蔵のこの徳利について、紹介します。

※「高田」の読み方については、生産地の展示パンフレットの表記にあわせ、本稿でも「たかた」と表記しています。

徳利をぶら下げて酒屋に通う時代

明治時代以降の日本の大衆文化の一つに、酒屋に酒が入った徳利を買いに行くというものがありました。そして、飲み終わった空の徳利を酒屋に持っていき、再び酒を注いでもらって買っていました。この文化は江戸時代からあったとされますが、特に明治時代以降、商売上手な酒屋が、客が違う店に行ってしまうようにと自分の店の名前や地名、電話番号を筆書きした徳利を貸与したとされています。そのため、酒屋に通う徳利として「通い徳利」と呼ばれたのも納得がいきます。また、はっきりとした由来は分かりませんが、酒ばかり買ってしまい、貧乏になってしまう人がいたことから「貧乏徳利」と呼ばれたという説もあります。日本の戦前(昭和10年代)までは徳利の首に紐を巻き付けてぶら下げ、酒屋に向かう酒飲みの姿がありました。



高田徳利

このコーナーでは、当館所蔵の資料や富士見市ゆかりの資料を紹介します。今ではあまり使われなくなったものからわたしたちの身近な歴史をひもといてみたいと思います。

生産地は美濃の高田

当時の「通い徳利」、「貧乏徳利」の生産地は、主に3地域があり、東から現・岐阜県多治見市の「高田」、現・兵庫県丹波篠山市の「(丹波)立杭」、現・佐賀県有田町の「有田」です。この3地域が日本の通い徳利の流通範囲を三分したといわれ、高田で生産された徳利は「高田徳利」と認知され東日本一帯の広域に流通しました。この流通域を確保できた理由として、高田徳利を販売していた商人の活躍があります。商人らは鞆かばんに徳利の見本を入れて東日本各地をまわり、各地の酒屋で徳利に書く文字の注文を取って販売していました。特に明治33年(1900)に中央線多治見駅が開業して以来、商人たちは鉄道を利用してはるか遠くの新たな販売地域の開拓に乗り出し、流通範囲を拡大していきました。

高田徳利に筆書きされた文字

高田徳利には大きく店名等の文字が筆書きされますが、これらの文字は焼成前の乾いた器面に鉄釉てつゆうや黒釉こくゆうで筆書きされ、その後焼成されて徳利の完成となります。資料館に収蔵された高田徳利には主に「酒屋等の店名」、「地名」が書かれています。紹介すると、「吉野屋」や「増田屋」、「堺屋」、「布屋」、「田中酒店」、「石崎」、「平野」、「南畑」などがあります。

明治時代以降の歴史を知るために、当時の古文書や行政文書等の紙に書かれた文字資料から歴史を読み解くことが多いですが、高田徳利のような「モノ」に書かれた文字資料からも「店名」や「地名」といった地域の歴史の一端を学ぶことができます。

(佐藤 一也)



墨書きされた店名や地名

＊ ＊秋のイベント予定＊ ＊

掲載したイベントは、感染症の影響などで中止・変更となる場合があります。

●令和7年秋季企画展

日常使いの近代「セトモノ」展 ～蔵に眠っていた食器たち～

会期／11月15日(土)～令和8年1月12日(祝)

会場／特別展示室 入場料／無料

●富士見市資料館友の会作品展

富士見市資料館友の会拓本、土器づくり、木綿、竹かご、ふるさと探訪、各部会の作品を展示します。
会期／10月18日(土)～11月3日(祝)

●富士見市児童・生徒社会科展

市内小中学生による、夏休みの自由研究の作品を展示します。各校から選ばれた約 80 作品です。
会期／9月27日(土)～10月5日(日)

●ふるさと体験「お月見だんごづくり」

とき／9月13日(土) 午前10時～正午

定員／8組(申込み順) 参加費／1組 500 円

会場／旧金子家住宅 協力／市民学芸員

申込み／9月2日(火)～10日(水)に電話で

●ふるさと探訪 三富新田の地割を眺望する

とき／11月1日(土)午前8時20分～午後12時50分

集合／鶴瀬駅西口 定員／20 人(申込順)

主な見学地／多福寺、木ノ宮地蔵堂、上富小学校、旧島田家住宅 参加費／500 円(当日集金)

※今回はバスの利用があり往復で440円必要です。

申込み／10月1日(水)～30日(木)に電話で

主催／資料館友の会ふるさと探訪部会・難波田城資料館

●さつまいも掘り

とき／10月26日(日) 午前10時～、午前11時～
(雨天決行・荒天時は次週へ延期)

集合／旧金子家住宅前 定員／各回16組(申込順)

参加費／1,500 円

申込み／10月4日(土) 午前9時から電話で

主催／難波田城公園活用推進協議会

●古民家コンサート～心に響くテノールの声～

とき／10月26日(日)午後1時30分開場

2時～2時30分

定員／30人(先着順) 参加費／無料

会場／旧大澤家住宅座敷 申込み／当日受付

出演／東海林尚文(声楽家・浅香郁子(ピアノ奏者)

主催／難波田城公園活用推進協議会

●ミニほうきづくり

とき／11月16日(日) 午後1時～3時20分

会場／講座室 対象／中学生以上 定員／10 人

指導／ほうき作り伝承会 参加費／1,000 円

申込み／11月1日(土)～11月11日(火)に電話で

●麦づくり体験(全7回)

公園内の田畑で小麦・大麦を育てます。育てた麦は小麦粉や麦茶にして試食・持ち帰りができます。

日程	内容
11月8日(土)	うね立て・種まき
令和8年1月24日(土)	麦踏み・土入れ
2月28日・4月11日(土)	草取り・土寄せ
5月24日(日)	麦刈り
6月13日(土)	脱穀
6月27日(土)	精選
7月12日(日)	製粉・焙煎・試食

定員／10 組(1組4人以内、申込順)

参加費／1組1,000 円(食材費等)

協力／難波田城いきものがかり

申込み／10月1日(水)から電話で

●ちよっ蔵市(難波田城公園活用推進協議会主催)

9月28日(日)ばたもち

10月26日(日)ふかしいも

11月はお休み

※11時より販売。売り切れ次第終了

※各イベントの詳細は広報「富士見」または資料館
公式サイトを御覧下さい。

●難波田城御城印発売中！

ご来園の記念などに是非どうぞ
(価格 300 円)。園内売店「ちよっ蔵」、資料館窓口で取扱っています。

田舎まんじゅう販売
第1.3日曜日 10:30～



お知らせ

「難波田城だより」のバックナンバー(カラー版)はこちらから

https://www.city.fujimi.saitama.jp/madoguchi_shisetsu/02shisetsu/shiryokan/nanbatajo/nanbatajo-dayori.html



富士見市立難波田城資料館

Tel. 049-253-4664 Fax. 049-253-4665

〒354-0004 埼玉県富士見市下南畑 568-1

https://www.city.fujimi.saitama.jp/madoguchi_shisetsu/02shisetsu/shiryokan/nanbatajo/index.html

◆休館日／月曜日(祝日を除く)、祝日の翌日(土・日・祝日を除く)、年末年始 開館時間／午前9時～午後5時

◇公園休園日／なし 開園時間／午前9時～午後6時(4月～9月) 午前9時～午後5時(10月～3月)

資料館公式サイト

